

ピアニストからみた 室内楽入門

第10回

歴史的ピアノとのアンサンブル

深井尚子●ピアニスト



Shoko Fukai

ウィーン市立音楽院修了。ウィーン古典派をレパートリーの中心に演奏活動中。特にベートーヴェンを深く研究しており、学術論文多数。ベートーヴェンピアノ・ソナタのCD第1集、第2集は好評発売中。色とりどりの小品集ハイドン、ベートーヴェン（ヤマハミュージックメディア）の校訂解説の楽譜も好評。現在、北海道教育大学音楽コース准教授。所属の「メビウストリオ東京」は、ヨーロッパ公演が行われ、好評を得た。



9月は、ウィーン（オーストリア）、ヴュルツブルク（ドイツ）のヨーロッパ2都市で『メビウストリオ東京』の演奏会を行いました。私は留学を終えてからも頻繁にヨーロッパで演奏をしています。ほとんどがソロリサイタルでした。今回は初めてピアノトリオで演奏し、ピアノソロでは気づかない新しい発見がありました。今月はそのエキサイティングな体験をお話ししましょう。

私は長年留学していましたし、ほぼ毎年のようにヨーロッパで演奏していますので、ヨーロッパパでの音の響き、ピアノの調整の仕方などには慣れていました。しかし、弦楽器の響きが日本とは大きく違い、よく鳴ることに少し驚きました。ホールの構造や素材の違い、気候の違いがその理由だと思っております。特に、ウィーンフィルハーモニー交響楽団のピッチの高さによる、華やかで明るい響きからも分かるように、ウィーンではそのような音質や雰囲気を経験的に好む傾向にあり、その響き



を実現できる演奏会場が多いのではないかと思います。それに対してヴュルツブルクでは、100年を超えるブリュートナーの歴史的ピアノで演奏しました。このピアノについてはぜひぶん前に『シヨパン』で紹介したところがあるのですが、現代のピアノとはアクションなどの機構が違い、弦の張力が弱く、ピッチも436ヘルツ（!!）というものです。ベートーヴェンの時代に近い楽器です。私はこのピアノで今までに何度もソロリサイタルをしました。が、ピッチが低いことは私自身の耳を



慣らすことで、タッチの違いもリハールで慣れる、というように演奏してきました。現代の豊かな響きに慣れた聴衆からは、この歴史的ピアノで聴く演奏を「優しくて、癒される」と好評を得ていました。今回は弦楽器奏者と一緒、さらにプログラムのチャイコフスキーとシューマンという大曲が2曲でした。まずピアニストひとりだと、ピッチが低くてもそのつもりで演奏します。しかし弦楽器はピアノにピッチを合わせますので、いつもよりかなり低く調弦します。低く調弦するということは、ウィーンで高めなピッチの演奏会とは正反対に、華やかな音質ではなく落ち着いた音質で、張りつめたような緊張感を出しにくいということになります。ヴュルツブルクでの会場は100名収容の小さいホールで、貴族のサロンのような、まさに「室内楽」という雰囲気での演奏でしたが、演奏会は大成功でした。私たちメンバーは、いつもとはかなり違う環境の中で不安を持ちながらの演奏でしたが、終演後「深い響きの中に音楽が満ちあふれていた」などの感想をいただき、ヨーロッパの聴衆の音楽への深い尊敬のような気持ちを感じることができました。とても素敵な体験ができ、音楽を共有する喜びに満ちあふれたヨーロッパツアーでした。